

剔出腎：小児頭大，重量1450g，腫瘍は腎盂から発し腎実質は下方に圧迫萎縮に陥っている。組織学的に癌真珠形成を認め扁平上皮癌である。現在迄欧米文献に記載されたものは1877年以来124例，本邦に於ては明治40年以来14例を数えるのみである。性別左右別発生頻度に差なく，最高令は81才，最低は3才半，平均年齢55才，術後5年以上生存例無く，平均術後余命5カ月の高度に悪性な腫瘍である。本例は術後4カ月生存中である。

5) 外傷性腎水腫の1治験例

鈴木恵之助

25才の男子。約3カ月前，相撲をとり左季肋部に強打。以後10日間血尿続き，安静の後軽快したが，約1カ月前より上腹部腫瘍に気付き，次第に増大，左鼠経部痛が加わつたため入院，検査成績では，腎機能に障害を認め，腎盂「レ」線で左側腎に排泄像を欠き，腎水腫の診断で腎摘出を施行，3週後に全治退院した。標本は内容420cc，腎盂は拡張して，一つの囊腫を形成，内面に多数の凝血塊があり，最大のもは $2.0 \times 2.5 \times 1.0$ cmに達す，壁は一様に薄く1~3mmの厚さ。組織学的に細尿管上皮，糸球体に圧迫萎縮及び硝子様変性を認め，間質に結合組織の増殖，軽度の円形細胞浸潤あるも，尿管には所見なく，既往と照らして明らかに外傷性に発生したと思われる巨大腎水腫であつた。且つ，当教室最近10年間の腎水腫は5例で何れも内容1Lを超える巨大なものであつた。

6) 大腸狭窄を伴える腸結核症の1例

梅本由己

症例：31才男子。

主訴 下腹部疼痛並びに腹鳴。

既往歴 結核性既往なし，ツ反応昭和28年陽転。

現病歴 約3年以来食思不振，下腹部痛，腹部膨満，最近腸狭窄症状を呈して来た。

現症 栄養不良，羸瘦，腹部全般に膨隆左側腹部に索状の抵抗を触知。レ線所見にて横行結腸の脾彎曲部に狭窄著明。

手術 廻腸末端口側150cmに亘り3カ所の狭窄，廻盲部横行結腸脾彎曲部に狭窄高度。廻盲部横行結腸切除，廻腸S字状結腸端側吻合術施行。

摘出標本 病理組織学的所見より結核と確認。

術後 経過良好30日目退院。

考按 腸結核症で外科的対象となる狭窄性並び

に腫瘤形成性のもの全腸結核症の5%以下で大腸結核の頻度が7%前後であることから大腸狭窄を主徴とするものは極めて稀有である。

7) 肝転移を伴える空腸滑平筋肉腫の1治験例

水戸赤十字病院 鷺田一博

患者は54才男子，Treizより数10cmの箇所にて空腸々壁の縦走滑平筋より原発した手拳大の筋肉腫とその転移巣を肝左葉に孤立性に有している。之に対してTreizから10cmの箇所から約1mの長さ空腸切除，端々吻合を施行し原発巣を，次いで肝左葉切除術により転移巣を剔出す。

その病理組織標本から明らかに筋肉腫なる事を認め，血行性肝転移なる事が証明された。患者は術後24日目に全治退院した。

空腸筋肉腫は頻度の極めて少いもので，その中筋肉腫は更に稀有とされる。又肝への孤立性転移を来し，本邦での肝肉腫切除報告例は我々のを加えて5例である。

8) 保存血輸血の副作用について

飯森忠康

中山外科に於て5,000回余の保存血輸血を行つて来たが，輸血直後重篤ショック症状を呈した3例を最近1年間に経験したので詳細に検討したところ，現在までに知られている副作用の原因とは明らかに異なるものがあつたので，此処に報告する。

3例ともB型保存血200cc輸血終了後20分にして突然軽度の悪寒と共に血圧極度に下降し，蕁麻疹の発生をみた患者例にはかゝるショックを誘発する様な素因は認められず，亦輸血せる血液にも何等異常は認めなかつた。その内1例は1週後に噴門切除を施行，術後第2日に死亡したので剖検せるところ，血液毒による中毒を思わせるものがあつた。

以上3例より之等副作用が発熱性反応，アレルギー性反応，溶血反応，感染等であるとは考え得ないので此処に報告し，未だ進歩の段階にある保存血で未知の副作用もあり得ることを報告し，併せてエーレツケル生物試験を推奨するものである。

9) 治療冬眠による2治験例

小波雅亮

最近船橋病院外科に於て，クロールプロマジンを中心とする所謂人工冬眠剤を術後疼痛除去，ショック予防等に使用し良好な結果を得た。時に，この薬